

令和2年度 茨城大学 学生地域参画プロジェクト 活動報告書



もぐもぐ通信 12月号

クリスマスも近づいてきて、今年も暮すところあと少しとなりました。寒い日も多くなり冬になってしまいました。

体を温める食べ物食べて、この寒い冬を乗りこえていきましょう！

クリスマスクイズ・なぞなぞコーナー

※答えはいちばん下にのってるよ！

Q1 名もないトナカイはどこに住んでるでしょう？
ヒント：名がないんです…

Q2 クリスマスの仲間クイズです。「トマト、ピーマン、にんじん、だいこん」仲間じゃないのはどれ？
ヒント：クリスマスの3つの色といえば…

Q3 <10回クイズ>「大人かい？」って10回言ってください。「大人かい？ 大人かい？」
サンタクロースが乗るのは何？

Q1：とかい Q2：にんじん（クリスマスの色は赤、緑、白だから） Q3：そり

さいごのクイズはみんな引っかけたかな？
うちの人も出してみてね！

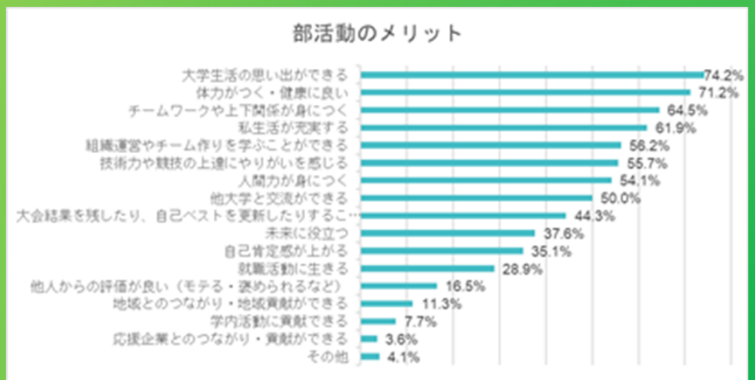
寒い季節には体を温める食べ物を食べよう！
皆さんはどんな食べ物が体を温めると思っていますか？
(体を温める食べ物)

ねぎ、にんじん、ごぼう、ごまつぼ、れんこん、かぶ、肉、
なつとう、チーズ など

冬といえば、鍋ですね！みなさんはちゃんこ鍋を聞いたことがありますか？ちゃんこ鍋は、もともと、お相撲さんが体を作るために食べていた鍋だそうです。必ず入れる具材は決まっていますが、肉団子やとうふ、にんじん、長ねぎなどを入れます。栄養満点で体を温める食べ物も取ることができます！

あとがき
今年も1年ありがとうございました。
来年はコロナが落ち着くといいですね。
たんとう (厚揚げ、きつね、きんぴら)

お問い合わせ先
茨城大学 学生地域参画プロジェクト
代表(福地) 電話: 280-4526 2212 メール: 18a213@ibvc.ibaraki.ac.jp
もぐもぐ通信(成城) メール: 18a2127@ibvc.ibaraki.ac.jp
お問い合わせ: https://js.spt.ac.jp/syokaku/h31_04_index.html



令和2年度 学生地域参画プロジェクト報告書

□活動報告

- FES (Food Education Supporter) ～食育応援隊～・・・・・・・・・・ 3
代表者 農学部3年 堀池 志帆

- 茨城大学地質情報活用プロジェクト・・・・・・・・・・ 7
代表者 理学部4年 佐藤 未笛

- 茨大農場産の有機農産物で地域の人々を元気に！・・・・・・・・ 11
代表者 農学研究科1年 福田 真丈

- 茨城県内の部活動コンサルティング・・・・・・・・・・ 14
代表者 人文社会学科3年 根岸 彩夏

FES (Food Education Supporter) ～食育応援隊～

代表者：農学部地域総合農学科 3年 堀池 志帆

連携先

水郷つくば農業協同組合 青田洋一様
阿見小学校
阿見第一小学校
阿見第二小学校
本郷小学校
あさひ小学校
君原小学校
舟島小学校

顧問教員

安江健 (農学部・教授)

参加者

伊藤友紀 (農学部地域総合農学科 4年)
鈴木日菜 (農学部地域総合農学科 4年)
飯田朋美 (農学部地域総合農学科 4年)
伊藤舞 (農学部地域総合農学科 4年)
鈴木亜実 (農学部地域総合農学科 4年)
高橋理子 (農学部地域総合農学科 4年)
宇賀神温 (農学部食生命科学科 4年)
黒澤まりな (農学部実践農食科学修士1年)
渡邊明花 (農学部実践農食科学修士1年)
草谷奈津子 (農学部実践農食科学修士1年)
酒井円香 (農学部実践農食科学修士1年)
宮田海 (農学部実践農食科学修士1年)
堀池志帆 (農学部地域総合農学科 3年)
成嶋緑 (農学部地域総合農学科 3年)
石倉未悠 (農学部地域総合農学科 3年)
杉原ほのか (農学部地域総合農学科 3年)
森山光 (農学部地域総合農学科 3年)
鬼澤彩乃 (農学部地域総合農学科 3年)
小林由莉 (農学部地域総合農学科 3年)

松浦拓哉 (農学部地域総合農学科 3年)
木村玲司 (農学部地域総合農学科 3年)
須々木陽音 (農学部地域総合農学科 3年)

プロジェクトの概要

●背景

阿見町では、町教育委員会と JA 水郷つくばにより、町内の小学校に対し食育事業が行われていた。この活動に 2014 年度～2016 年度までは有志の学生が自費で支援を継続し、現在まで食育事業を継続できたという背景がある。そして 2017 年度からは有志の学生が増え、更なる参画ができると考え、本プロジェクトに応募し、採択された。自分たちで直接積極的に小学生との交流活動を行うことで、食育活動の継続と発展を目指している。

●目的

阿見町の 7 校の小学校で、本サークルが直接的に食育や授業のサポート等で小学生の活動を支援する。将来を担う子供たちの食及び茨城大学、地元への関心を高めることで、阿見町の発展に貢献することを目的として活動している。

●食育への思い

私たちの活動は実際に小学校の中に入っている活動で、地元や農業についての楽しさや大切さを知るきっかけづくりができることを強みとしている。

農村の高齢化、過疎化が進み、食料の安全が危ぶまれる中で、一人でも多くの児童に阿見町や農業、食への魅力を感じてもらいたいという思いで活動している。「小学生は地

元の宝であり、FESの活動が将来の地元の活性化に繋がる」ということで、農協の方々や先生方も熱意をもって協力、支援をしてくださっている。

●活動内容

昨年度までは、小学校での主な活動として、

- ①授業サポート
- ②農業についての授業・農作業
- ③食に関する広報の作成・配布を行っていた。

本年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、

- ①食に関する広報の作成・配布
- ②学校給食の食材の畑作業
- ③学校サポーターを中心に活動した。

プロジェクトの成果報告

●今年度の活動及び成果

- ①食に関する広報の作成・配布

毎月「もぐもぐ通信」という題で食や農業に関する広報を作成し、各クラスに掲示してもらっている。興味を引くデザインや分かりやすい言葉遣いなどにより、様々な食べ物について低学年でもわかりやすく伝わるように工夫した。

本年度は、この広報が活動の中心であった。来年度、より良いものに改善していくため、児童・教員にアンケートを行った。その結果をまとめた。

アンケート結果(児童、教員 計 253名)

(1)もぐもぐ通信の内容で面白かったものは？

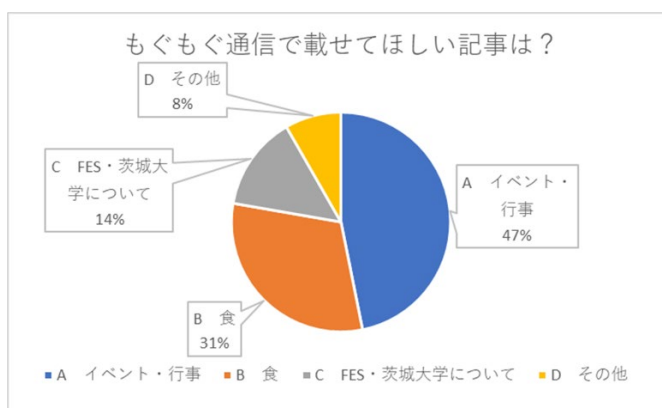
- ・1位 季節のイベントについて(クリスマス、ひなまつり、ハロウィン、節分)

ス、ひなまつり、ハロウィン、節分)

- ・2位 豆知識(食、季節、行事、健康)
- ・3位 クイズ、なぞなぞ

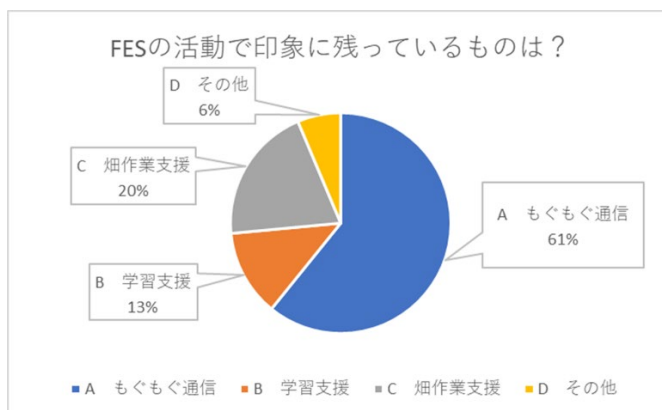
であった。イベントと食を関連付けた内容や、その月のことについての説明が面白いと思ってくれている方が多かった。

(2) (ABCD 選択式)



約半数がイベント・行事についての記事を今後も載せてほしいと分かった。その他では、SDGs や豆知識、クイズなどが挙げられた。

(3) (ABCD 選択式)



約6割がもぐもぐ通信であり、約2割が畑作業支援であった。

<考察>

アンケート結果より、多くの人が「季節の

イベント・行事」についての記事が面白いと
 感じてくれていると分かった。今後も引き
 続き載せていこうと思う。

また、本年度はもぐもぐ通信が FES の活
 動の中心であったので、来年度は、畑作業支
 援・学習支援にも力を入れられるようにし
 たい。

もぐもぐ通信、2020.12月号

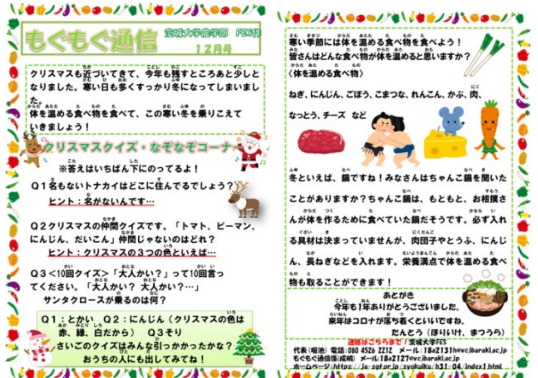


図2 里芋収穫作業の様子

③学校サポーター

主に学習支援、児童の健康管理などをサ
 ポートした。FESからは、3名がそれぞれ阿
 見・君原・舟島小学校へ行った。

私は、舟島小へ行った。舟島小の子どもた
 ちは本当に元気でパワーをもらった。一緒
 に野球やドッジボールをしたり、授業で分
 からない問題がある子にヒントを出して教
 えたりした。教員を目指す私にとって、とて
 も良い機会で勉強になった。

②学校給食の食材の畑作業

学校給食に出す生姜と里芋の播種・雑草取
 り・収穫を行った。JA水郷つくばさんとお
 借りしている畑で作業している。



図1 里芋の雑草取りの様子



図3 阿見小での畝づくりの様子



図4 君原小での体育の様子

来年度への引継ぎをしっかりと行い、継続して取り組めるようにしたい。また、来年度は可能な限り中学校にも活動の幅を広げ、より地元に着したサークルになることを目標とする。更なるきっかけ作りとしては、もぐもぐ通信の個人への配布等も検討し、主体的な活動で貢献できることを増やしていく。

食育活動の継続はもちろん向上のためには、周囲の方々の協力がなくてはならない。先生方や阿見町に働きかけることでサークル活動の幅を広げていきたいと思う。



図5 舟島小での理科:電磁石の様子

※本年度は、コロナの影響で4月～5月、11月～2月はほとんどサークル活動が禁止されており、2～3月の学校サポーターはFESとして依頼を受けたが、個人のアルバイトとして感染対策を十分にしながら活動した。また、学校サポーターは各学校1(～2)人である。

●今後の展望

今年度は感染症対策を行いながら、三密をさけなければならない状況であり、なかなか思うように活動は出来なかった。しかし、出来る限りのことはしてきた。これからも、小学校との繋がりが途切れないように、

.....
連携先

茨城県北ジオパーク推進協議会事務局
(株) 東京地図研究社

顧問教員

小荒井 衛 (理学部・教授)

参加者

城戸口 和希 (理工学研究科 理学専攻 博士
前期課程 1年)
佐藤 未笛 (理学部理学科 4年)
小林 香澄 (理学部理学科 4年)
杉竹 栞 (理学部理学科 4年)
関谷 拓海 (理学部理学科 4年)
横路 友翼 (理学部理学科 4年)
河又みさき (理学部理学科 3年)
山田 直輝 (理学部理学科 3年)
渡辺 詩織 (理学部理学科 3年)
小川 美宇 (理学部理学科 2年)
栗原 佳宏 (理学部理学科 2年)
田中 美紗 (理学部理学科 2年)
古庄 航輝 (理学部理学科 1年)

プロジェクトの概要

●プロジェクトのテーマ

地質・地形情報は、あらゆる地域に存在する。地質や地形の情報というのは、自然災害に対する防災関連、鉱石や石油などの資源採掘・開発はもちろん、その地域に暮らす人々の生活・文化に深く関わり、景観などの観点から観光資源としても重要である。しかしながら、これらの情報は専門的

なものが多く、一般にあまり知られていない。地域の人々に地質・地形情報を観光資源などに活用してもらうためには、これらの情報を分かりやすく、興味を持ってもらえるように伝えることが必要である。そこで本プロジェクトは次の2つをテーマとして掲げる。

- ・茨城県内の地質・地形の情報を地域振興に活用する。
- ・茨城県内の地質・地形の情報を地域の人々に普及する。

●プロジェクトの目的

地域の人々に地元の地質・地形に興味を持ってもらい、観光資源として活用してもらうためには、専門的な情報・知識を一般向けに分かりやすく表現することや、その地域のどこにどのような地層や岩石、鉱物があるのか、また、そのような情報はその地域の生活・文化などにどのような関わり合いがあるのかということを発信していくことが必要である。

また、地域の幅広い年代の人々にこれらの知識が将来的に根付くには、小中高生が地元の地質・地形を学ぶ機会を得て、そこから興味を持ってもらうことが必要である。

本年度のプロジェクトでは、以下の2つを目的として活動を行う。

- ・茨城県の地質・地形情報の発信
- ・茨城県の小中高生に対する地学教育の振興

●連携の内容・活動日程

- ・茨城県北ジオパーク推進協議会事務局

ジオサイトマップの製作にあたっての地質・施設情報の提供に協力していただいた。地質の専門家や地域の地質・地形に詳しい方の紹介をしていただいた。ハイキングコースマップの製作にあたっては、デザイン・内容のアドバイス（一般人・登山者向けを意識）をいただいた。

・(株)東京地図研究社

本年度製作した日立ジオサイトマップ・五浦海岸ジオサイトマップの地図情報を作成していただいた。

・活動日程

定期活動は週1回（前期：金曜日5限後期：水曜日5限）のオンライン会議を行い、事務連絡や各々の進捗具合・課題とその解決法について話し合った。それ以外は、本プロジェクトの企画ごとに班分けを行い、各自で作業・調査を行った。

プロジェクトの成果報告

●ジオサイトマップの改訂

過去の活動において茨城県北ジオパーク内の観光に用いることができるパンフレット『ジオサイトマップ』を作成し、活用されていた。しかし、地図を見て地形が読み取りにくいことや、制作されてから5年以上が経過したことから情報に古くなってしまっている点が生じるなどの問題点が浮上した。

そこで昨年度より、(株)東京地図研究社の協力の元、現在の情報に合わせた情報修正や地形を読み取りやすいよう地図を差し替える作業を行った。昨年度は水戸・千波

湖、平磯海岸、常陸太田の3地域を対象に改訂を行った。（作成した常陸太田については情報に不備があるため手直しが必要）

本年度は、五浦海岸、日立の2地域を対象に従来のジオサイトマップの改訂を行った。改訂に関してCOVID-19の影響により、当初予定していた常陸太田、常陸大宮の2地域は先延ばしになった。

図1は五浦海岸ジオサイトマップの改訂前と改訂後である。改訂した日立ジオサイトマップの地図情報は国土地理院に申請前なので図は掲載しない。マップ面は(株)東京地図研究社より作成していただいた地図情報をもとにジオサイトマップのストーリーに関連する地質・地形の観察ポイントや施設(STOP)を加えている。先にも述べたが、改訂前の地図よりも地形情報が見やすくなっている。表紙面はその地域の地質・地形を地域の成り立ちや文化・産業などに関連して説明している。改訂前のジオサイトマップは情報の羅列が目立ち、パンフレットを通してどのようなことを知ることができるのかが分かりづらい面があった。改訂版ではテーマを明確にしてストーリーのつながりを重視した。

五浦海岸ジオサイトマップでは、五浦の由来である5つの入り江がどのようにできたのかということをテーマに製作している。最後は特徴的な5つの入り江となっていることで津波の威力が大きくなるということを伝えるように構成した。実際に2011年3月11日の津波の到達高を例として挿入した。また、五浦の歴史に欠かせない岡倉天心は五浦海岸の奇岩を好んだが、これも入り江を作る上で重要な要素となっており、パンフレットの中に取り入れている。

日立ジオサイトマップでは、日立の発展には日本最古（約 5 億年前）の地層と関連があることをテーマに製作している。これは、日立の発展には日本の工業化に合わせた日立鉱山の発展が密接に関連しており、日立鉱山で採掘していた鉱床のほとんどが日本最古の地層に位置するというつながりを指している。改訂前の日立のマップでは構成としてこれらの情報が独立していたが、つながりがあるかのようなキャッチコピーだったため、つながりがあり、分かりやすく時系列の構成とした。

この 2 つのジオサイトマップは来年度印刷し、配布する予定である。



図 1 五浦海岸ジオサイトマップ（上段：改訂前、下段：改訂後）

●日立ハイキングコースマップの製作

日立の高鈴県立自然公園内の 2 つの駐車場にハイキングコースマップを載せた看板を設置するため、そのデザインの製作依頼が茨城県北ジオパーク推進協議会からあった。マップは登山者向けに周辺の登山道や水場、トイレなどの情報と注意書きを記載した。そして、登山者が登山中に岩石に目がいくように、あるいは周辺の地質に興味を持ってもらえるように地質情報を記載した。看板の設置は来年度行う予定である。

●小学生向け地学教材の製作

以前より、本プロジェクトは、地球科学について広く知ってもらうため、大学の内外でジオパークや本プロジェクト、そして地球科学について一般の方々にも広める活動をしていた。昨年度、本プロジェクトは地球科学をより身近に、より深く知ってもらうため、教育現場である学校（特に小学校）で地球科学に触れてもらうことが重要であると考え、茨城県内に焦点を当てた地球科学の副読本の作成に取り掛かった。

本年度は、昨年度に引き続き地球科学の副読本の作成を行い、文章の表現の修正を行った。教育学部の先生・学生に参考意見をいただく予定であったが、COVID-19 の影響により、現時点では実施していない。

●地学実験動画の製作

前述の副読本による教材製作の他にも、同様の理由で地学実験動画の製作に取り掛かった。茨城県内で起こった（起こっている）地学現象を扱い、実験の様子をビデオカメラで撮影し、その地学現象の説明を動画内に入れることを予定している。動画製

作の理由としては、現象は動きを伴うものが多く、静止画よりも動画の方が分かりやすいと考えたからである。また、動画はインターネットによる公開が容易であり、情報の発信という上では適当だと考えた。

本年度は、逆断層・付加体形成の実験を行った。図2は実験の様子を示している。成層した地層を横から一方に力を加えて逆断層が起こる過程を撮っている。また、スケールを広くすると海洋プレートの沈み込みによる付加体の形成（八溝山地など）を模している。動画の完成は来年度を予定している。

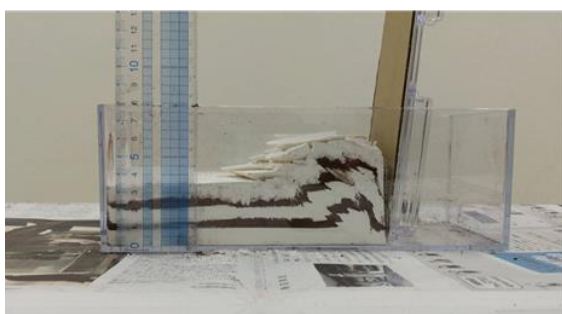


図2 断層形成実験の様子

●今後の課題

以下に今後の課題を挙げる。

- ・小学生向けの地学教材をテストする小学校が決まっていない。そして、専門家や様々な人の意見を取り入れることができていない。
- ・地学実験動画を教材として活用できるように、現象の説明を動画に挿入する編集作業
- ・ジオサイトマップの設置場所の拡大

●今後の展望

本年度は、COVID-19の影響で思うように活動が進まず、製作したもののすべて完成するには至らなかった。五浦海岸・日立ジオサイトマップの完成後、チェックと修正が入り、茨城県北ジオパーク推進協議会によって印刷を行い、配布を行う。この際、設置場所の拡大を考えている。また、使い勝手のアンケート調査を行いたいと考えている。本年度製作できなかった常陸大宮・常陸太田ジオサイトマップの製作を行う予定である。作成した小学生向け教材の評価を得るために専門家や教員の意見をうかがう予定である。地学実験動画に関しては、小中高生向けに動画の内容・表現を調節して変える予定である。また、河川の実験など多くの地学実験動画の製作を予定している。そして、前述の地学教材と合わせて小学校で試験的に教材として活用してもらおうことを考えている。

茨大農場産の有機農産物で地域の人々を元気に！

代表者：農学研究科 1年 福田真丈

連携先

ami seed

顧問教員

小松崎将一（農学部・教授）

松浦江里（農学部・助教）

参加者

福田真丈（農学研究科農学専攻 1年）

高嶋尚哉（農学部地域総合農学科 4年）

渡辺翔史（農学研究科農学専攻 1年）

LI PEIRAN（東京農工大学

連合農学研究科農業環境工学専攻 2年）

GONG YINGTING（東京農工大学

連合農学研究科農業環境工学専攻 2年）

プロジェクトの概要

●背景

茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター（以下、茨大農場）では農生態学研究室のメンバーが様々な農作物の試験栽培を行い、研究に取り組んでいる。今年度を実施された研究を挙げると、福田は不耕起草生栽培におけるロボット芝刈機の適応性に関する研究を行った。不耕起草生栽培とは土を耕さずに草を生やしながら農作物を栽培する方法であり、有機農業（化学的に合成された肥料及び農薬を使わないことを基本に環境への負荷を減らす生産方法で行われる農業）の一種である。本栽培法は農業の支えである土壌の浸食を防止できること、また、地中に多くの炭素を貯留できるため地球温暖化の緩和策の一つとして挙げられる等、多くの利点がある。不耕起草生栽培を

行う上で、草丈の高い雑草の繁茂を防ぐために定期的に刈払機などを使って草丈を維持する作業（雑草管理）は農作物の生育を良好にするために必要であるが、夏期に人手で行う雑草管理は労力を要する。そこで本研究では不耕起草生区にロボット芝刈機を導入し、ミニトマトの新しい不耕起草生・有機栽培技術の検討を行った（写真 2,3,4）。渡辺が行った研究は、キャベツのみを作付けるのではなく、レタスやエンバクといった他の農作物を間作として作付けることで虫害の防止が期待できる、キャベツの新しい栽培技術に関する研究である（写真 5,6,7）。その他にも大豆や水稲などの試験栽培に取り組んでいるメンバーもいる。その中の一つミニトマトは水戸キャンパスや茨大農場の直売所で販売などを行い、好評を得て嬉しい一方で、それでもなお、消費しきれない収穫物が残ってしまう状況があり、食べ物を大切にしなければならないと思うと同時に、私たちが一生懸命栽培した農作物をより多くの人に食べてもらいたいという思いがあった。そのような時に ami seed のフードパントリー活動（家庭で余っている食料品を持ち寄り、ひとり親さん、独居の高齢者の方、学生などに食料品を無料で配布する活動）の存在を知った。加えて阿見町内で片親世帯が 460 世帯、単独高齢者世帯が 4300 世帯もあること。そして地域の大学でコロナ禍によりアルバイトができなくなり、生活に困窮している学生が多数いる現状を知ったことで、農生態学研究室のメンバーが育てた農作物を地域の方々に提供し、少し

でも元気になってもらいたいと考え、本プロジェクトを立ち上げた。

●目的

ami seed と連携し、研究で試験栽培した農作物（販売基準を満たさない農作物）を阿見町域の経済的に困難な方に供給することで地域の方々を支援するとともに、ami seed の代表である清水氏を講師として招き、セミナーを開催することで学生が地域の課題について学ぶ機会を作ることを目的とした。

プロジェクトの成果報告

今年度は新型コロナウイルスの影響により、ami seed が主催する食料品無料配布会（写真1）への参加ができなかったことやami seed 代表の清水氏との対面での打ち合わせの自粛など、活動をする上でスムーズにいかないことはあった。来年度は食料品無料配布会において農産物を地域の方々に提供する際に茨大農場の活動内容を紹介したカード等を添え、“茨大農場産の農産物”であることをアピールしていきたいと考えている。また、茨大農場のホームページを利用して本プロジェクトの情報発信にも取り組んでいく。こうした活動が阿見町域の方々への支援の輪をさらに広げることができると考える。オンラインセミナー（Microsoft Teams を利用、ami seed 清水氏を講師として招待。）を2021年2月25日（木）14:00～15:00 に開催し、地域の課題についてより深く学ぶことができた。

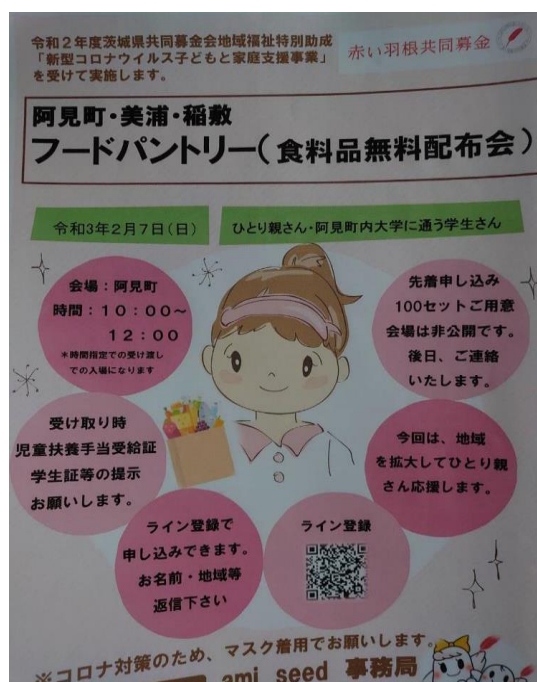


写真1:食料品無料配布会の広告
(ami seed 代表:清水氏提供)



写真 2 : ロボット芝刈機と
不耕起草生栽培によるミニトマト



写真 5 : キャベツ, レタス, エンバクの間作



写真 3 : 2020 年 8 月 24 日に収穫した
ミニトマト



写真 6 : キャベツ, レタスの間作



写真 4 : 収量調査の様子



写真 7 : 生育調査の様子

連携先

株式会社 art01 代表取締役 丹下寛仁

顧問教員

桐原 武文(社会連携センター・専任教員)

参加者

根岸 彩夏(人文社会科学部現代社会学科 3年)

伊東 優真(人文社会科学部現代社会学科 3年)

佐々木 幹太(人文社会科学部現代社会学科 3年)

松浦 由依(人文社会科学部現代社会学科 3年)

プロジェクトの概要

1. 背景

根岸が所属する女子ラクロス部では遠征やコーチの派遣に多額の費用がかかり、個人の負担額が高い。それが理由で部活をやめてしまうメンバーがいたり、満足のいく活動ができなかったりしてしまっている。

松浦が所属する男子サッカー部は、監督やコーチが不在の完全学生主体型の部活であるうえ、部員の部費だけで金銭をやりくりしている。ユニフォームやボールといった必要経費、チーム及び個人登録費、交通費など全ての経費を、少ない部員で賄っている。

このように部活動をしたいという気持ちは同じなのに、大学の区分や部員数(母体数に影響を受ける)、財力等の点で、機会を阻

害されることは不平等ではないかと考えるに至り、またその状況を変えたいと考えた。

2. 目的

地域の企業と連携して部活動内に存在する問題を解決することで、部活動と地域の企業、双方の活性化を図る。また部活動設立後のスタートアップガイドの作成や、軌道に乗せる役割を担うことで、部員が少ないために仕事量が多く、競技に集中できる環境を整えていく。

最後に、地域や社会人とのつながりを通して部活をしているだけでは得られない出会いや経験を知ってもらう。

3. 内容

4章で述べている活動計画に沿い、学生の現状の調査を行い、どのような課題があるのかを明らかにしていき、その上で地元企業と連携を結ぶためのシステムを構築していく。

4. 活動計画

STEP 1. (対象：茨城県内の大学生、期間：4か月)

当プロジェクトのニーズ調査を行う目的で、部活動が抱える課題を Zoom を用いてヒアリングを、WEB アンケートを用いて把握を行った。(結果に関しては成果報告にて記載)

STEP 2. (対象：茨城県内の企業、期間：7か月)

ニーズを踏まえて県内全域 10 社の企業へのヒアリングや現在の学生の状況を伝え、その上で地元企業の動向を調査を行い、協力してくれる部活団体と地域企業を対象にコンサルティングを演習していく。

STEP 3.

STEP2. で得られた知見から、マニュアルの作成などを行い、継続的に企業と部活団体が連携していけるシステムを構築していく。

※いずれも「地域に対してなにができるのか」という点を模索する

プロジェクトの成果報告

■ 「茨城大学部活動生への実態調査」概要

目的：部活動のメリットと課題に感じていることを調査する

回答期間：令和3年2月1日（月）～令和3年2月8日（月）

対象者：茨城大学の部活・サークル団体所属者（OBOG、コーチを含む）

回答人数：194人

方法：Google Form

■ 単純回答 結果

部活動時間の増減において図1のようなデータがとれた。

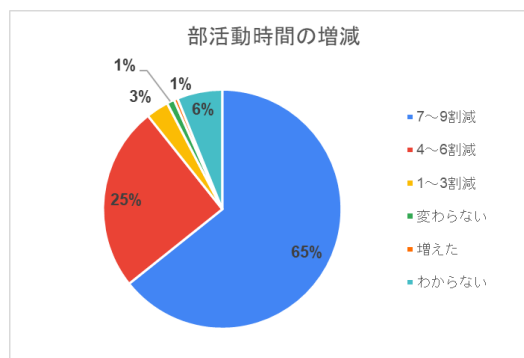


図1. 部活動時間の増減

全体の92%が部活動時間が減少しているという結果が表れた。この他に活動時間だけではなく、金銭面での問題、活動場所の問題など学生たちからは様々な現状の問題があがってきた。

学生からは企業との連携に意欲的な声も多く、地元企業を知るきっかけにもなりその企業への興味を抱いたり、インターンなどへの参加を希望したりするというような声があった。

■ 部活動のメリットと課題

Q1 部活動のメリット（個人）

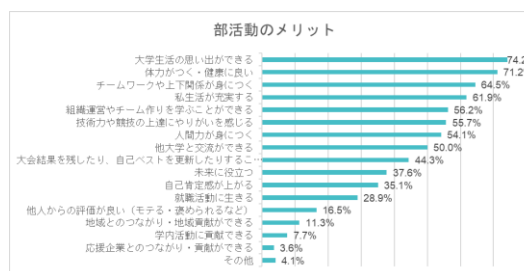


図2. 部活動のメリット

その他…

- ◇ 茨城大学記録を更新できる
- ◇ ストレス発散になる
- ◇ 「大学で何してるの？」と聞かれた時

の返しになる

- ◇ 目標ができる
- ◇ 学科以外の交友関係が広がる
- ◇ 先輩とのつながりができる
- ◇ 一度も活動していないためわからない
- ◇ メリットはない

Q2 部活動をする上で困っていること

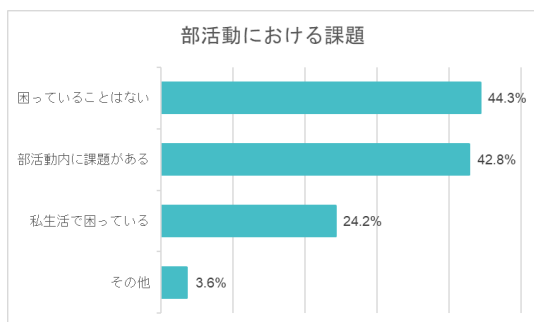


図3. 部活動をする上で困っていること

その他…

- ◇ 自身の力不足に困っている
- ◇ 大学からの支援がない
- ◇ 移動手段
- ◇ 一度も活動してないためわからない
- ◇ 新型コロナウイルスの影響で、活動ができない
- ◇ 新型コロナウイルスの影響で、土日に学校のグラウンドが使えない

Q2.1 「部活動内に課題がある」とは

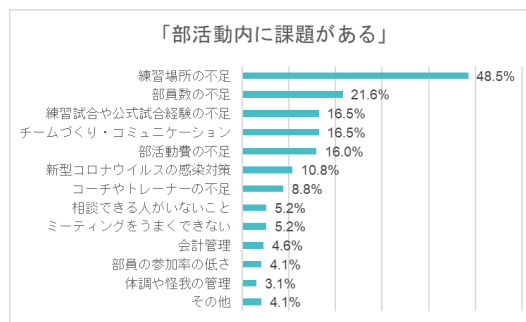


図4. 部活動内の課題の内訳

その他…

- ◇ 地域や他サークル・部活、他大学との交流機会が少ない
- ◇ 努力や仕事をしない部員がいる
- ◇ 組織運営
- ◇ 後輩へのいじめ
- ◇ 練習器具の老朽化

Q2.2 「私生活で困っている」とは

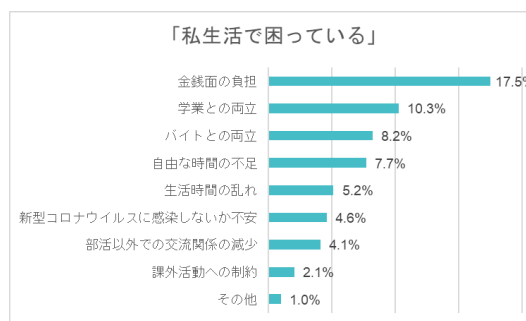


図5. 私生活で困っていることの内訳

その他…

- ◇ 食事管理によるストレス
- ◇ 移動するのに時間とお金がかかる

Q3 新型コロナウイルスの影響

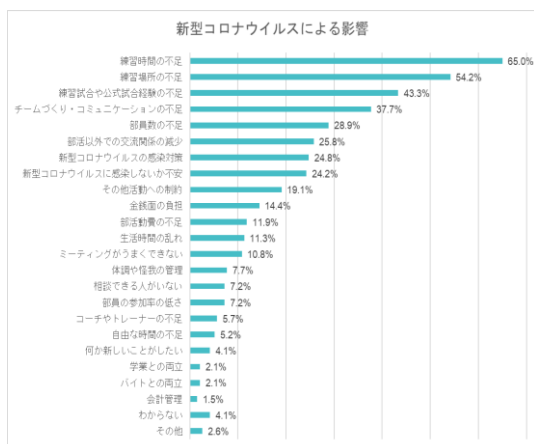


図6. 新型コロナウイルスによる影響

その他…

- ◇ 活動自体がなくなった
- ◇ 大学側の対応の不備
- ◇ 後輩への技術伝承の難しさ
- ◇ 身内から部活に行くことを止められる
- ◇ モチベーションの低下

Q4 部活をよりよいものにするために必要なもの（記述回答）（カッコ内は人数）

金銭的援助

- ・金銭的な補助、助成金（4）
- ・大学からの活動資金の援助（6）
 - 練習環境の充実に使用する
 - 大学の体育館が使用できず他の有料施設を借りているため（3）
- ・交通費等の援助（1）

活動場所・活動時間

- ・活動場所の確保（19）
- ・図書館のグループワーク室（1）
- ・サークル棟（2）
- ・部活以外で部員が集まれる場所（1）

・練習環境の充実（3）

・芝のグラウンド（4）

・ナイター（2）

・広い弓道場（1）

・体育館（1）

・活動時間の確保（8）

・活動の規制緩和（14）

内、感染症対策について触れていた回答（5）

- ・体育館の利用規制緩和（1）
- ・オンラインでの活動状況の把握と環境の整備（1）
- ・部員に活動できる条件を周知する（1）
- ・練習場所の情報サイト（1）

人員面

- ・部員の増加（12）
- ・充実した部員数（4）
- ・活動が認知されるような広報（2）
- ・直接の勧誘（2）
- ・大学をあげた新歓活動 e.g. 新歓祭（2）
- ・新入生との交流の場・オンラインイベント（3）

アドバイス・知識習得（4）

- ・指導者・アドバイスをくれる人の存在（4）
- ・モチベーション維持・向上のために、競技知識を得る機会が欲しい（1）

組織運営（5）

- ・丁寧且つ迅速な引き継ぎ（1）

- ・活動目標に沿った活動方針を決めて一年間の運営をすること (1)
- ・チーム内の規則づくり (2)
- ・リソースの確保およびマネジメント (1)

チームの士気・部内での交流

- ・コミュニケーション・チームワークの向上 (21)
- ・会議中の活発な意見交換 (1)
- ・部員の意識統一 (2)
- ・高めあえる雰囲気づくり・活気 (2)

・部内の交流機会 (9)

- ・1年生との交流 (1)
- ・練習以外 (2)
- ・意見交換の場 (2)
- ・金銭面や活動に関する話し合い (1)

新型コロナウイルス (16)

- ・コロナが終息すること (7)
- ・感染対策 (2)
- ・感染対策と活動環境の両立 (7)
- ・工夫次第で活動が可能だと思う (1)
- ・コロナに関する共通認識を持つ (1)
- ・感染対策をしながら活動ができれば多くの課題が解消される (1)

大学 (5)

- ・学生支援課との連携 (2)
- ・課外活動と大学の集中講義等が重ならないよう配慮してもらいたい (1)
- ・大学からの支援の拡充 (1)
- ・部活軽視をやめる (1)

その他

- ・個人の成長 (2)
- ・学生のやる気の尊重や促進できる動機 (試合などがすくなく目標やモチベーションを保つことが難しい) (1)
- ・参加自由形のスポーツ交流会やイベント (2)
- ・艇庫飯 (漕艇部からの回答) (1)
- ・活動に対する周囲の理解・周知 (2)

Q5.1 企業と連携できた場合、企業側に求めるもの（記述回答）（カッコ内は人数）

金銭面 (42)

- ・金銭的援助 (42)
 - 道具の購入に使用する (4) e.g. トランポリン

練習環境 (28)

- ・練習場所の確保 (16)
- ・施設の充実 (9)
- ・グラウンド (2)
- ・移動 (3)
 - バスが欲しい (1)
 - キャンパスが離れているため (1)

物資 (25)

- ・道具 (13)
 - 的や安土 (1)
- ・消耗品 (5) e.g. テーピングやスポーツドリンク、プロテイン
 - 現在は個人によって使用する商品に違いがあるが、企業からの提供によって他大学や他学生にも認知が広がり利用者の増加が見込める
- ・練習着・ユニフォーム (4)
- ・その他 (3)
 - ウェブサイト (1)
 - 楽器の修理や調達 (1)
 - 部品加工 (1)

就職・アルバイト・キャリア系 (8)

- ・進路や就職に関するサポート (5)
 - インターンの機会 (1)

- アルバイト先の提供 (1)
- ・将来のことを考える機会 (2)
 - 社会経験を積める場 (1)
 - 部活の経験が将来どんな場面で役立つのかを考える機会 (2)

大会・イベント (8)

- ・大会・試合・イベントの開催 (4)
- ・大会や演奏会開催時の後援 (3)
 - 景品や会場代 (1)
 - 開催に関わる専門分野からの助言 (1)
- ・練習相手 (2)
 - 人数不足なので一緒に練習をしてくれる仲間を集めたい
 - 実業団との練習試合をしたい

競技技術・知識 (8)

- ・技術面の指導 (5)
 - 身体の使い方の指導 (2)
 - プロ雀士に指南を受けたい (1)
 - バドミントンのコーチがいないため指導や練習メニューの見直しをしてもらいたい (1)
- ・専門知識の習得 (2)
 - スポーツ選手の講習会 (1)

広告・認知度 (4)

- ・活動を広める機会 (2)
- ・スポンサー契約・応援 (2)

企業との交流・連携 (3)

- ・企業の実業団等や所有サークルとの交流 (2)

・研究開発 (1)

- 研究開発を二人三脚で進められるように社員と学生との連携が取れるようにしてほしい。(1)

その他

- ・アプリケーションなどを使って食事や、健康状態の管理
- ・部活動に対して大きな目標ができるといい

批判的意見

- ・私の所属する部活動を基準として以下記述する。ご容赦願いたい。まず、大学部活動に企業が利益追求の目的で介入することは、これを認めないとする確約が必要であると思う。大学生という存在が企業に利益の面で貢献することは無いと思っているからであり、また大学部活動を形成した当初の大学の理念に一部抵触する恐れがあると見ている。貢献という発想は、地域との結び付きの面で拡充を図るものによったであろうが、地域と大学生とが浅薄な関係である以上は何も望めるものはないと思う。部活動が、学生にのみ開かれている訳ではない(地域との親和性は保つ必要がある)のと同様に、企業側の利益競争のある種のカードとしてあるべきでも無い(学生の主体性を一意に崩すことはできない)と考える。
- ・強い大学はスポンサー契約等ありますが、中堅の大学は両方にとってのメリットが特にないと思います。

Q5.2 企業と連携できた場合、企業側のメリット (記述回答) (カッコ内は人数)

宣伝広告・PR・知名度の向上 (50)

- ・企業の認知が広まる
- ・大学部活動がいい成績を残したり、大会に出たりすることで、企業の名前が広まる
- ・イベントで気球を飛ばせる = 熱気球同好会

社会・地域貢献、企業のイメージアップ (26)

- ・チームサポーターからの企業イメージの向上
- ・地域密着のイメージがつく
- ・好感度が上がる

就職・キャリア (19)

- ・本当に企業に必要な人材の発見や勧誘ができる
- ・将来就職してくる学生の増加につながる可能性がある
- ・学生の就職動向を把握できる

意見・モニター (9)

- ・学生との交流によって若い世代の流行やニーズを知ることができる
- ・大学生や若い消費者目線での深い意見を提供できる = アンケートモニターや座談会
- ・部活動を動かして、より多角的に事業に取り組める

大学生との交流 (8)

- ・社会人クラブや社内部活への参加
- ・学生が加わることで活発さが増す

- ・現在の学生について知ることができる

売上向上 (6)

- ・学生に商品やサービスを利用してもらう
- ・人間は知っているものしか使わない傾向が強いため、旅行会社などであれば卒業後も利用するのではないか
- ・部活動に積極的な大学生という新たな顧客層が獲得できる

5. 考察

上記の結果から、学生が部活動において課題を抱えていることは明白であり、それを解決するための一つ的手段として地元企業との連携は効果的なものと考えられる。部活動によっては引退の時期が遅く、就職活動に取り組むことが難しい、あるいは遅れてしまっているという状況がある。このような学生に部活動をしながらでも、地元企業との連携を通して会社について知り、インターンなどに参加することは、学生が地元(茨城県)に留まることにも貢献できる可能性が高い。企業側にとっても、大学で部活を4年間続けるという、意欲のある学生を採用できるというメリットも提供してい

ることが可能である。

このように今回の結果からだけでも、地元企業と部活団体が連携することによって解決できる課題は多く、更にお互いのメリットも多いということが分かった。

しかし、それ以前に部員数の確保や練習環境の整備、新型コロナウイルス対策と課外活動実施のバランスといった、学内で取り組むべき課題が多くあると気づいた。まずは学内活動を充実させることで学外活動に目を向けられるようになるのではないだろうか。

6. 今後について

以上の考察を踏まえ、4月の新入生勧誘に向けたイベントを企画し、それによって課外活動に所属する学生数の増加させることで、茨城大学の課外活動の活発化を目指す。また、イベントを課外活動団体との関係性構築や当団体の知名度向上にもつなげ今後のプロジェクトに役立てたい。

アンケートに関しては、今回は学生からだけの回答であったが、これをもとに地元企業はどのようなことを求めているのかを知り、より連携のしやすい方法を模索していきたい。



問合せ先
国立大学法人茨城大学 社会連携センター
(研究・社会連携部社会連携課)
〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1
TEL:029-228-8585
FAX:029-228-8495
E-mail:renkei@ml.ibaraki.ac.jp